

2023年



# マナ通信



## 今月のマナ通信

◎7月の週日の聖書日課：ヘブル人への手紙、アモス書、ヤコブの手紙、オバデヤ書、ヨナ書、ペテロの手紙第1、他）  
 ◎土曜日・日曜日の学び：神の子イエス① からの感想です。

**ア**モスは南王国ユダのテコアという小さな町で生まれました。ベツレヘムから東南に10km程下り死海が見下ろせる岩山の中腹の町でした。羊を飼い、イチジクを栽培して生計をたてている農家で、都会とはかけ離れた静かな町でした。田舎者でした。

時代的には捕囚期前の預言者で、当時北王国はヤロブアム2世、南王国はウジヤが統治し、二人は共に良き国王でした。その為、経済が発展し裕福であったが悲しいかな貧富の差もある国でした。近隣諸国の争いは、当時勢力を増していたアラム（シリア）がアッシリヤに敗れ、そのアッシリヤもまだそれ程勢力が強くなかったので攻撃を受けることなく平和な時代でした。

しかし、バブル景気の物質的繁栄の裏には、宗教的墮落と道徳的腐敗がありました。そこで、神はなぜかこのアモスに啓示を与えて、南王国テコアから北王国ベテルに預言者として遣わしたのです。

当時ベテルは都会でひらけていました。知識人が多く、田舎者のアモスは苦勞したと思われる。まして、景気が良く、平安の世で、罪のため滅びるイスラエルを語るのは勇気のいることだったと思います。だが、住民の浮かれているなかでアモスは力強く語っています。その上、ベテルは金の子牛を拝む偶像礼拝の町でした。

思い出しましたが、「使徒の働き」によるとパウロもアテネで福音を語り始めると、それを聞いていたアテネの知識人は、話を聞く前にバカにして「この話は次の機会に聞こう」と云って相手にされなかったのです。

問題は墮落している民族は、神がモーセを通してエジプトから連れ出した神の選民だということです。選民だけに神の裁きもまた厳しいものがあります。

神のことばを拒絶する者たちに遣わされたアモスは繰り返し罪の断罪、さばきの警告をしてきました。章が進むにつれて、より深刻なさばきが予告される中、8章で強烈な宣告が告げられることとなります。

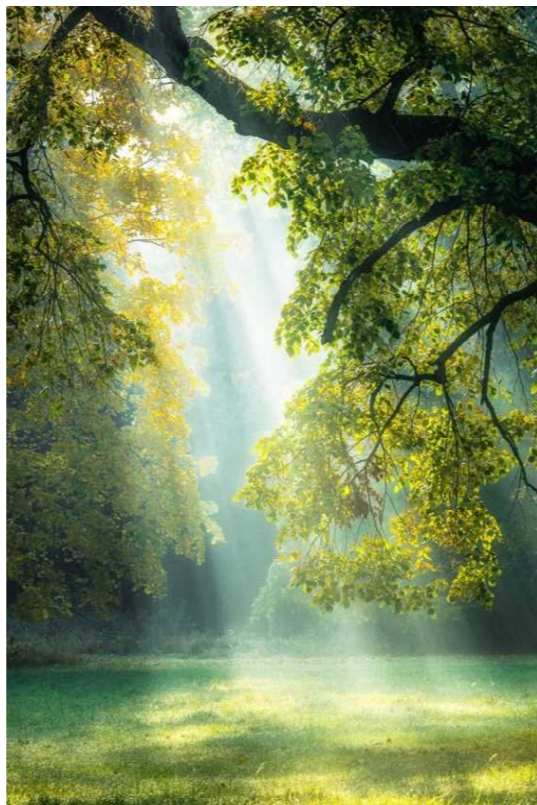
「見よ、その時代が来る。——【神】である主のことば——そのとき、わたしはこの地に飢饉を送る。パンに飢えるのではない。水に渴くのではない。実に、【主】のことばを聞くことの飢饉である。彼らは海から海へと、北から東へとさまよい歩く。【主】のことばを探し求めて行き巡る。しかし、それを見出すことはない。その日には、美しい若い女も、若い男も、渴きのために衰え果てる」（アモス8:11-13）

解説では、パンに飢えること、水に渴くことより恐ろしい、主のことばを聞くことの飢饉。預言者に対して「預言するな」と言う者たちの願い通りになるさばきです。

ここで、アモスが告げる「主のことばを聞くことの飢饉」とはどのようなものなのでしょうか。これは、主のことばが失われるのではなく、主のことばがこの世に届けられているのに、それを聞くことが出来なくなる状況。これは何か。語る人が不在となる、神のことばを告げる人がいない状況になるということです。

神の民の大事な使命は、「主のことばを聞くこと」、そして「主のことばを伝えること」

しかし、この時の北イスラエルのように主のことばを聞くことを拒絶し続ける結果、何が起るかといえば、主のことばを伝える使命も果たされず、結果としてますます主のことばから遠ざかる悪循環。アモスが告げることばがより深刻になる理由が、ここにあります。



私は思いました。云っても聞かないイスラエルのバカさ加減にアモスは絶句しています。これじゃ神のことばを伝える人がいなくなる。アモスはどん底に突き落とされた感じだったことでしょう。アモス書は教えます、そこにあった住民の姿は、現在に生きる私自身の姿でもあります。

しかし、神は義なる方で、確かに悪をさばかれることが確認されてきたアモス書。その最後は、さばきの宣告ではなく回復の宣告となっています。

「わたしは、わたしの民イスラエルを回復させる。彼らは荒れた町々を建て直して住み、ぶどう畑を作って、そのぶどう酒を飲み、果樹園を作って、その実を食べる。わたしは、彼らを彼らの地に植える。彼らは、わたしが与えたその土地から、もう引き抜かれることはない。——あなたの神、【主】は言われる。」（アモス9:14-15）。（畑中伸之）



**ヨ**ナ書、〈みことばを味はおう〉から教えられました。

私たちの神様は世界を造り支配されているお方。世界の中で、神様がお知りにならないことはなく、神様の許しなしに起こることはありません。本来、この教えは私たちに大きな平安を与えるものです。……神様の統治に納得がいかないとき。神様のみこころを知りつつも、実現したくないとき、大きな不安の中で生きることになり、苦しむこととなります。このテーマで葛藤し苦しんだ信仰者ヨナのことから学びがありました。

ヨナが活躍したのは北イスラエルがヤロブアム王の時代、敵国のアッシリアが衰退し、北イスラエルは繁栄を手にしました。神様はヨナに、アッシリアの首都ニネベで裁きの宣告を告げるように命じられます。

裁きの宣告を聞いたニネベの人たちが悔い改めましたら、その結果衰退しているアッシリアが力を盛り返し、やがて神の民にとって脅威となってしまう（実際、やがて北イスラエルはアッシリアに滅ぼされることとなります）

結局、ヨナは神様の召しに答えず、ニネベに行かないことを決断。さらに民の間に留まることもできず、タルシシへと逃げようとしてます。その船上で大嵐に遭います。船長はじめ皆が、遭難しないように必死でいる時に、ヨナは船底で寝入っていた。やがてヨナのせいでのわざわいが起こっているのだと解って、ヨナは告白します。

9節「私はヘブル人です。私は、海と陸を造られた天の神、主を恐れる者です。」と証しします。危機的状況の中で人々に主なる神様を紹介する姿は、さすがは預言者と言えるでしょうかと解説者が記しています。……ヨナと関わりを持つとされる神様の優しさを覚えます、と。……タルシシ行きに乗る人々に神様のことを伝えようとしたわけでもありません。自分に与えられた使命を放棄して逃げ出しただけです。

しかしヨナが逃げ出したからこそ、船の人々は主なる神様を知ることになりました。3章3節、ヨナは主のことばの通りに、立ってニネベに行って大きな都を3日かけて行き巡り「あと40日すると、ニネベは滅びる」まことの神に罪を悔い改めるように伝道します。

王をはじめ、すべての人、家畜にさえ粗布をまとわせて、ひたすら神様の御前に悔い改め、飲み食いさえしないで、神様に願ひ悪の道から立ち返ったと。

しかし、なんと、4章でヨナは神様がわざわざいを思い直し、それを行われなかったことに非常に不愉快になった、怒ったとあります。

続きは兄弟方の知るところですが、不従順な預言者、逃げ出す預言者、それでもヨナを用いられる神様、それも逃げ出したということ自体を用いられる神様の力強さを覚えます。

自分の身に置き換えて、今日までの主のご愛、憐れみ、導きをなお深く思われ、賛美が頭の中を行き巡っております。(福島三弥子)

聖歌442番〔十字架のうえにて〕

①十字架の上にて、なしとげられし またなき救いの みわざをうたわん  
かかる罪深き 者も救いて み子となしませる きみぞ貴き

**忍**耐というのは、信仰のあるクリスチャンにしか生まれてこない(みことばを味わおう 57頁)の文章にはっとさせられました。

今まで忍耐と我慢をあまり正確に区別していませんでした。我慢は人間の力でできるが、忍耐は神の賜物と言ってもよいとは、目から鱗でした。なるべく試練は避けたいですが、信仰があればこそ忍耐できると、忍耐は神様からのギフトであると、心に刻みます。

忍耐と試練は表裏一体ですね。「様々な試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと思いなさい。」このみことばの疑問が解けました。

Iペテロ1章の「生ける望み」を読んで記憶の底に沈んでいた思い出がよみがえりました。

私が信仰に入るきっかけとなったのが、生きる目的は何だろうという疑問でした。受験とか就職とか短期的な目標で生きていいものなのか、今でいうもやもやとした感情を抱えていました。

当時は罪ということにあまり関心がなかったように思います。神様は存在するという、確信を持った時に受洗しました。罪の許しの十字架の身代わりの死を心で深く受け止められるようになったのは、ここ10年くらいの気がします。

ウエストミンスター小教理問答の第1問「人の生きる目的は神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである」を読み、そんなことできそうもないと思ったことは、しっかりと覚えています。

禁欲的な生活を強いられ窮屈そうに感じていました。信仰に入るか入らないかの頃のことです。

「生ける望み」をそうとは知らずに頂いて今に至っていることに、改めて感謝です。この愛にこたえていきたいとしみじみ覚悟させられました。(広瀬裕子)



**神**の律法は、罪を犯す人にその罰としての死を要求してきます。

私たちすべての人は罪を犯すものとして生まれ、数々の罪を犯してきました。ですから、律法の下に生きる私たちはみな死なねばなりません。

一方で、イエス様はこの世に生きている間、律法の下にある者として、律法の要求するすべてを完璧に遵守されました。

しかし、父なる神は人を救うために、律法を遵守されたイエス様に、人のすべての罪を負わせました。それ故、律法はイエス様に罪の罰である死を要求します。それがあの十字架上での死です。私たちの身代わりとしての死です。

私たちは、そのおかげで、罪から贖われ、義とされ、罪のさばきや呪いから救われました。

そればかりか、イエス様の身代わりの死によって、律法に縛られていた私は、キリストのからだによって律法に対して死んでしまい、律法から解放されました。

それで、今、他の人である死からよみがえったお方に結ばれることができます。新しい妻となるのです。それがどういうことか、この先の項目の解説に期待をもちます。(高橋美枝)

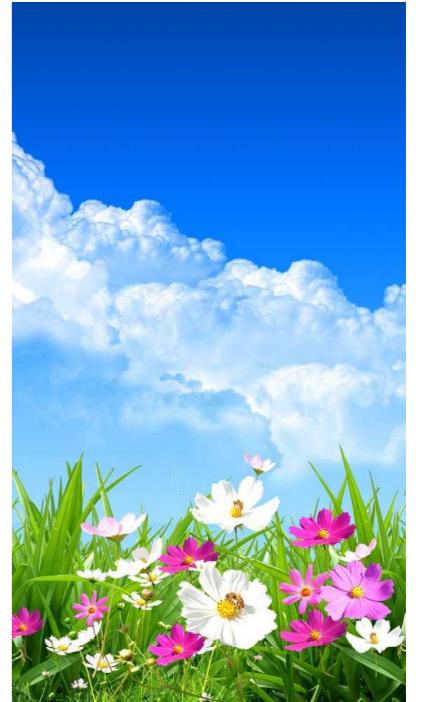
**今**日か明日、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をしてもうけよう」と言っている者たち、よく聞きなさい。あなたがたには、明日のことは分かりません。あなたがたのいのちとは、どのようなものでしょうか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それで消えてしまう霧です。あなたがたはむしろ、「主のみこ

ろであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう」と言うべきです。(ヤコブ4:13-15)

ヤコブの警告が、そのまま今の自分に当てはまるような気がしました。私たちのいのちはしばらくの間現れて消えてしまう霧のようなものです。

しかし主は私たちの永遠の望みを与えてくださり、愛してくださっています。そういう存在である私は、「主のみこころであれば、私たちは生きて」あれをしよう、これをしようと言うべきなのに、先に自分の計画を発表して突き進もうとしてしまいます。

それがカッコいいと思ってしまうのです。本当に自分のあさはかさに情けなくなります。それでもなお、主は愛を与えてくださりヤコブの聖句を通して私に教えて下さっています。感謝です。(永井亮子)



**あ**なたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。(Iペテロ5:7)

「あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあって永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみした後で回復させ、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。」(Iペテロ5:10)

聖書は、思い煩いを神様に「ゆだねなさい」と勧めています。私は、今まで、この「ゆだねる」ということをしてきませんでした。私の祈りは、「今日は、こんなことがありました」と、1日の報告と失敗談的なものでした。私はとても弱い者です。

信仰とは、自分でどうすることもできないことを「ゆだねる」ということかもしれない。そして、心配や思い煩いが尽きない、私のことを神様が心配してくださるということが慰めです。

堅く信仰に立つ秘訣とは、やはり「ゆだねる」ことではないでしょうか。しかし、ゆだねることは自分の意志でできることではありません。神様に一切のことをゆだねたいと思います。ゆだねることができるように導いてください。(木村邦夫)

**主**のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが神には選ばれた、尊い生ける石です。あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。(Iペテロ2:4,5)

[みことばを味わおう]には、「<sup>かなめいし</sup>要石」というのは・ある辞書によれば「トンネルやアーチなどの構造物において全体を支える要になっている石。欠けてはならない要素」とあります。

イエス様は、私たちにとって、真に「<sup>かなめいし</sup>要石」の存在です。また、私たち一人ひとりを生ける石として用いてくださいます。なんと感謝なことでしょう。ありがとうございます。少しずつでも、主を証ししていけたらと願います。(外處トミ)



トミ姉妹の実家(宇都宮)の庭の花

我がために 主が据えられた 要石  
ただ感謝して 歩み行くなり

2023年7月31日

**試**練を耐え忍ぶ人は、さいわいである。それを忍びとおしたなら、神を愛する者たちに約束されたいのちの冠を受けるであろう。(ヤコブ1:12)

今のつらいことも、神様が益としてくださることを感謝して、神様に信頼して今日も生きていきたいです。(外處光歩)

**す**べての訓練は、そのときは喜ばしいものではなく、かえって苦しく思われるものですが、後になると、こ

れによって鍛えられた人々に、義という平安の実を結ばせます。」(ヘブル12:11)

自分の力では越えられないような試練に直面するとき、神様が忍耐という賜物を与えてくださることを期待します。いつも神様を見上げて、神様から与えていただく力と信仰をもって歩いていくことができれば幸いです。(外處結実)

**試**練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、イエス・キリストが現れるとき、称賛と栄光と誉をもたらします。」(Iペテロ1:7)

神様は私達の受ける試練を金よりも高価なものと言われています。私にとっては知っていたはずなのに改めて以外に感じてしまう御言葉でした。

波のように訪れる試練に嫌気が差してしまう弱い信仰の日々の中で、どうにか主を見上げて一歩一歩ふらつきながら歩いておりますが、それが神様にとって貴いことであると知り、深い平安を覚えます。

試練は神様から受けるものと知識の上では理解して耐え続けていたように思いますが、改めてこの御言葉は、日々の試練は正しく、神様の御前を歩ませていただいている証拠であることを認識できました。

さらに永遠の御国で称賛と栄光と誉をもたらすほどに価値あるものとは何という驚きでしょうか。この啓示をお与え下さった主に心から感謝します。(外處徳昭)



**もし**本当に、あなたがたが聖書にしたがって、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という最高の律法を守るなら、あなたがたの行いは立派です。9 しかし、もし人をえこひいきするなら、あなたがたは罪を犯しており、律法によって違反者として責められます。10 律法全体を守っても、一つの点で過ちを犯すなら、その人はすべてについて責任を問われるからです。11 「姦淫してはならない」と言われた方は、「殺してはならない」とも言われました。ですから、姦淫しなくても人殺しをすれば、あなたは律法の違反者になっているのです。12 自由をもたらす律法によってさばかれることになる者として、ふさわしく語り、ふさわしく行いなさい。13 あわれみを示したことがない者に対しては、あわれみのないさばきが下されます。あわれみがさばきに対して勝ち誇るのです。」(ヤコブ2:8-13)

ヤコブ書を読むとヤコブは、私たちキリスト者に十戒を守らせようとしてるように思えます。彼は、殺人と姦淫を禁じている第6戒と第7戒に、はっきり言及しています。また、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」と言うことによって、後半の5つの戒めを要約しています。しかし、キリスト者を(生活の規範としての)律法の下に置くことは、新約聖書の他の部分の教えと矛盾します。

たとえば、ロマ6章14節には、「あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にある」とあります。同じ手紙の7章6節には、「私たちは……それ(律法)から解放され」とあり、7章4節には、「あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対して死んでいる」とあります(ガラテヤ2:19、3:13,24,25、Iテモテ1:8-9、ヘブル7:19も参照)。キリスト者が十戒の下にはないという事実は、IIコリント3章7-11節に、はっきり記されています。

では、なぜヤコブは、この恵みの時代の信者に、律法に関することを押しつけるのでしょうか。まず第1に、キリスト者は生活の規範としての律法の下にはいません。律法ではなく、キリストが信者の手本であり、規範です。律法があるところには、刑罰もなければなりません。律法を犯すことに対する刑罰は死です。

キリストは、人間の犯した律法の刑罰を受けるために死なれました。それゆえ、キリストのうちにいる者は、律法とその刑罰から解放されています。

しかし、律法の諸原則には永久的な価値があります。これらの教訓は、あらゆる時代のあらゆる人に当てはまるものです。偶像礼拝、姦淫、殺人、そして盗みは、基本的、本質的に悪いことです。そのようなことは、信者はもちろん、未信者にとっても悪いことなのです。

そのうえ、10の戒めのうちの9つは新約の書簡にも繰り返し出て来ます。出てこないのは、安息日に関する戒めだけです。キリスト者が安息日(週の第7日目)を守るように命じられている箇所は、どこにもありません。この戒めは道徳的なものというよりむしろ儀式的なものだからです。ユダヤ人が週の第7日目に働くことは、それ自体は基本的には悪いことではありませんでした。それが悪いこととされたのは、神がその日を

他の日と区別されたからです。

最後に、新約の書簡に繰り返し出て来る9つの戒めは、律法としてではなく、「神の民のための義の教え」として記されています。つまり、神はキリスト者に、「もし盗んだら、あなたは死刑の宣告を下される」とか、「不道徳な行いをしたら、あなたは自分の救いを失ってしまう」とか言っておられるのではないということです。そうではなく、神は次のように言っておられるのです。

「わたしはあなたをわたしのめぐみによって救った。だから、わたしに対する愛から、きよい生活を送ってほしい。もしわたしがあなたに望んでいることを知りたいなら、新約聖書の中にそれを見いだすことができる。十戒のうちの9つが繰り返し出てくるのがわかるだろう。しかし、あなたは主イエスの教えも見いだすことになる。そして、その教えは、実際には、律法よりもさらに高い基準の振る舞いを要求しているのである」。

ヤコブは、実際には、信者を律法および律法による処罰の下に置いているわけではありません。彼は、「もし人をえこひいきするのなら、あなたは律法を破っているのであり、それゆえ死の宣告を下される」と言っているのではありません。ヤコブが言っていることは、次のようなことです。

「信者であるあなたがたは、もはや律法に束縛されてはならず、(自由の律法)の下にいる。その自由とは、正しいことを行う(自由)である。モーセの律法は隣人を愛するように要求したが、そのための力を与えることはなく、また、それを実行できない者を罪に定めた。

恵みの中では、隣人を愛する力が与えられ、もしそれを行えば報酬を受けることになる。救われるためではなく、救われたゆえに行うのです。刑罰を恐れるからではなく、自分のために死んで復活されたお方に対する愛のゆえに行うのです。キリストのさばきの座に立つ時、この基準に従って、あなたがたは報酬を受けるか、あるいは損失を被ることになります。これは「救い」の問題ではなく、「報酬」の問題です。」

「ふさわしく語り、ふさわしく行いなさい」という表現は、「ことば」と「実行」のことを言っています。公言したこととその生活が一致していなければなりません。ことばにおいても行いにおいても、信者はえこひいきを避けるべきです。そのように自由の律法に違反すれば、キリストのさばきの座でさばかれることとなります。

この13節は文脈に照らし合わせて理解しなければなりません。ヤコブは信者に語りかけています。永遠の刑罰の問題が扱われているわけではありません。その刑罰は、感謝なことに、カルバリの十字架で、ただ1度行われました。

ここでは、神がこの世で私たちを子どもとして扱っておられることが問題となっています。もし他人に「あわれみ」を示さないのなら、私たちは神との交わりのうちに歩んではならず、信仰が後退した結果に苦しむこととなります。

また、この「えこひいき」という重要な問題に関しても自分自身を吟味しましょう。自分と異なる人種の人たちよりも同じ人種の人たちのほうを親切にしている、ということはないだろうか。

年配の人たちよりも若い人たちのほうを親切にしているか。美人やハンサムな人とばかり交際してはいないか。知り合いになりたいのは、有名な人たちばかりではないだろうか。

身体的な弱さや健康面の問題を抱えている人たちを避け、丈夫で健康な人との交わりを求めてはいないだろうか。貧しい人たちよりも裕福な人たちに好意を示してはいないだろうか。ことばに「なまり」のある人に、よそよそしい態度を見せるようなことはないだろうか。

これらの質問に答えながら、私たちは、愛すべき最も小さい信者にしたことが、救い主にしたこととみなされることを忘れないようにしたいですね(マタイ25:40)。(福島勲)

貴重なご感想をありがとうございました。

次回はマナ8月号の感想を9月10日までに福島兄弟へお寄せください。(畑中)

